

第13回リハ工学カンファレンス での技研の活動

リハビリテーション工学という研究分野での最大のカンファレンスが、岐阜県大垣市で開催され、成功裡に終了した。

技術研究所は演題発表から運営にまで大きく関わり成果を取めた。

はじめに

平成10年8月20日(木)~22日(土)までの3日間、岐阜県大垣市にある情報産業団地ソフトピアジャパンにおいて、リハ工学カンファレンス(日本リハビリテーション工学協会主催)が開催された。

カンファレンスは第13回を迎え、今年も多数の参加者が集い、リハビリテーションに関する教育や、作業現場で役立つ機器や技術について、議論を通して会員相互の交流を図った。参加者は、障害者、工学・医学・福祉・教育・行政など幅広く行き渡っている。

技研の活動

技術研究所は、本カンファレンスに実行委員1名、座長1名、演題発表1件、スタッフ3名と大きく関わった。

演題発表は、昨年度の研究事業において開発を行った乗り物について、「介助用駆動ユニット付き車いすの開発」と題して行なった。発表当日の夜に行われたイブニングセッションでは、この演題に対し興味を示した各方面の参加者の間から、是非市販化して欲しいといった要望が上がり、市販化への手応えを感じた。

カンファレンスの内容

今年のカンファレンスの特徴として、毎年多数の演題発表がある車いす、コミュニケーション、姿勢保持以外に福祉情報、社会制度といったソフト面における内容での発表が多数見られた。福祉情報の発表の中では、リハ病院の福祉機器適合システムの提案、リハセンターでの取り組み、インターネットによる福祉情報等について、社会制度の中では、障害者・高齢者の交通システム、車いす対応路線バスの現状と問題点等についての情報提供がなされた。その他としては、入力装置、移乗・移動、視覚・言語等に関する分野での発表が行われた。

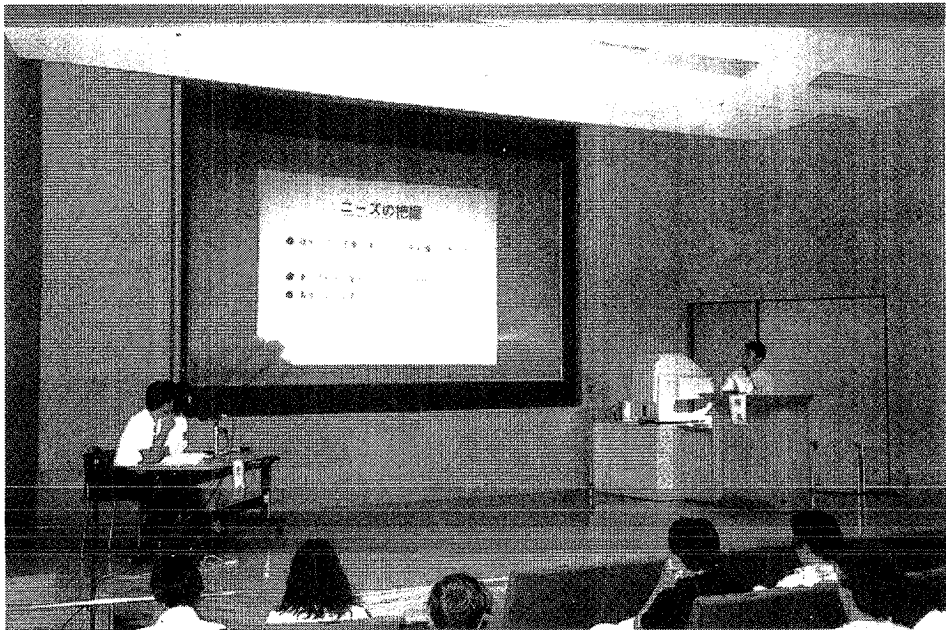
会場メインホールでは、国内の主要福祉機器メーカーによる商業展示や、岐阜県の福祉機器に関する取り組み等が紹介されていた。カンファレンス2日目には第10回福祉機器コンテスト企業・研究グループ、一般の機器開発部門、個人の機器活用部門での表彰式が行われた。いずれの製品も完成度が高く、実用レベルにまで達しているように感じられた。

特別シンポジウムでは、荒木通産省医療・福祉機器産業室室長、三友厚生省社会参加推進室室長、(株)松永製作所松永社長他3名のパネリストを迎え、それぞれの立場から福祉社会における支援技術の役割について報告された。また、衣服のバリアフリーが遅れている現状の中で、新風を巻き込む取り組みの1つとして、岐阜県内のアパレル業界が主となり高齢者・障害者のためのファッションショーが行われた。

第13回リハ工学カンファレンスでの技研の活動



カンファレンス会場



演題発表

(技術研究所 車いす開発室)